S・ハイム対第一一回中央委員会総会

塚田眞幸

一、

一九六五年一二月一六日から一八日にかけて開催された社会主義統一党（SED）第一一回中央委員会総会は、ドイツ民主共和国（DDR）の文芸史にとってたいへん悪名高い総会として関係者に記憶されている。この総会に関して『皆伐』と題する回想、証言、ドキュメント集が九一年に出版された。①

なぜ悪名高いかといえば、「このSED第一一回中央委員総会は、最初でも最後でもなかったが、SED指導部が芸術の創作過程と知識人をめぐる論争に対してきわめて容赦ない介入を行ない、多方面に重大な影響を及ぼすこととなった総会であった」からである。②すなわち、作家たちに限っても、この総会の席上で批判されたのはシュテファン・ハイムばかりではない。エードゥアルト・クラオディウス、ハイナー・ミュラー、ペーター・ハックス、

ヴォルフ・ビーアマン、マンフレート・ビーラー、ヴェルナー・ブロイニヒ、クラオス・ポッペ等の作品が、エーリッヒ・ホーネッカー、ヘルマン・アクセン、ホルスト・ズィンダーマン、パオル・フェルナー、クルト・ハーガー、アレクザンダー・アブッシュ、アルフレート・クレラ等の指導的党幹部たちによって総攻撃を受け、その後ホーネッカーの書記長就任（七三年）による一時的な雪解け期を除いて、七六年のビーアマン国籍剥奪事件にいたる長い年月の文学・芸術シーンがきびしく規制されることになったからである。また文学作品ばかりでなく、造形芸術や映像作品も批判され、ＤＥＦＡ製作の映画などは二六本も上映禁止となり、再上映されたのはベルリンの壁崩壊以後という有様であった。

権力の側が芸術の分野に、こうした露骨な干渉を行なったからには、それなりの事情、背景があったはずである。またハイムという作家を考える際に、スターリン主義との関係を抜きにして考えることはできない。他の社会主義的作家の場合と同様である。ＤＤＲ文学史に関してしばしば言及されることのある二つの文書、ハイムが党から激しく批判される原因となった『スターリン退場す』と『ミンスクの退屈』[3]を、遅ればせながらここで改めて検討しておくことも無駄ではあるまい。ハイムはこれ以後スターリン主義的社会主義に対しては、批判的立場を貫いたからである。そのためハイムは権力の側から理不尽な攻撃、いやがらせを受け続けたことも忘れられてはならないだろう。それに両独統一後の九四年には週刊誌『シュピーゲル』一三号が、ハイムの一時期をとらえて、かれがいかに悪質なスターリン主義者だったか、という攻撃記事を掲載した。[4]長年にわたってハイムに紙面を提供してきたことも忘れたかのように、かれが統一ドイツの政治にコミットしようとすると、古証文を持ち出してきて非難するというのは、東独でＳＥＤ独裁に文句をつけているのはいい、しかしこの連邦共和国の権力に盾つくのは許さない、

というボンの権力意志の露骨な表明以外の何ものでもなかろう。これが言い過ぎというなら、『シュピーゲル』のボン政権に対するアリバイ表明と言ってよかろう。両サイドから攻撃されたという事実こそ、ハイムが本来の意味での社会主義者であることを反証している。

これについては別稿で扱ったのでここでは繰り返さないが、[5] いずれにせよハイムはスターリン主義とははっきりと手を切った文書を残している。スターリン主義との関係を曖昧にしたままの社会主義者が多いなかで、これはその人物を判断するうえでの重要な試金石であると言えよう。それがまさに本稿を書く由縁でもある。

注

① Günter Agde (Hrsg.) : Kahlschlag. Das 11. Plenum des ZK der SED 1965. Studien und Dokumente. Aufbau Taschenbuch 1991.

② ebd. s.9.

③ Stalin verläßt den Raum. Stefan Heym : Wege und Umwege. Streitbare Schriften aus fünf Jahrzehnten. C. Bertelsmann 1980. S.289ff.
Die Langweile von Minsk, ebd. S.294ff.

④ Der Spiegel. Nr.13 1994. S.228ff.
Jürgen Serke も同じ趣旨の発言をしている。
zuhause im exil, Piper 1998. S.11.

⑤「シュテファン・ハイムは悪質なスターリン主義者だったか?」『ドイツ演劇・文学の万華鏡』岩淵達治先生古希記念論集　同学社一九九七年　三七七頁以降

二、

さて、SED中央委員会第一一回総会にあてた政治局の報告のなかで、ホーネッカーはハイムに関して、こう批判している。

「勤労者諸君は手紙の中で、ハイムに反対の態度を表明した。なぜならかれはDDRにおけるさまざまな状況に対して、つねに否定的批判者の一人だからである。かれは西独出国を利用して、自分の小説『Xデー』を宣伝したが、この小説は六月一七日事件を完全に誤って表現しているかどにより、当局により許可されなかったのである。かれは西側で出版されている新聞や雑誌に記事を書いているが、その中でソ連やDDRの生活を誤って描いている。真実のみを弁護すると称しているが、その真実とは西側を志向している。〝真実〟なのだ。かれの言いふらしている〝真実〟とは、労働者階級ではなく、ただ作家と科学者だけが、新しい社会を指導する資格がある、という主張なのである。だが社会主義は、マルクス＝レーニン主義にもとづいて闘う党によって指導される労働者階級が他のすべての、知識階級を含めた他のあらゆる勤労者たちと結んで行なう仕事であり、またあり続けるのである。」①

もちろん、この杜撰な批判に対してハイムは、六六年二月のベルリン作家同盟総会での演説で、徹底した反論を展開した。

まず、ハイムに反対する勤労者諸君の手紙とは、一二月一〇日のベルリン新聞にのったものであることを指摘し、これが勤労者諸君の手によるものではなく、ドイツ文化連盟のパンコウ郡書記のヘンリエッテ・ヴェルニケと、パンコウ区の文化担当の公務員ホルスト・ラオデによるものであることを明らかにしている。またその手紙の内容は、

ハイムの『新ドイツ文学（NDL）』九月号に発表された短編小説に対する皮肉であるべき論駁だが、皮肉というのは、ハイムの短編では、神が悪魔を遣わして、自分の文化欄編集者とは意見の違う演劇批評家を解雇から守らせるが、現実のベルリン新聞では、悪魔が遅れてやって来たので、演劇批評家のドクター・ポラチェックは、文化欄編集部と意見が違うというので早めに退職させられた、という事実にあらわれているが、これに人びとはショックを受けたのではないか。

次に、ハイムがDDRのさまざまな状況をつねに否定的に批判している、という点に関しては、党機関誌『ノイエス・ドイッチュラント（ND）』の文化欄編集者クラオス・ヘプケの報告を引用しつつ、この報告がハイムのフランクフルト（マイン）の西ドイツ書籍見本市出席の機会に行なわれた西ドイツの放送やテレビでの対談を検証して、教条主義の牙城としてのDDRという共産主義的ペテンにちゃんと対処し、個人崇拝の時代に典型的な諸現象はDDRにはなかったと強調し、ヴァルター・ウルブリヒトを擁護した、と結局はハイムの言動を肯定していた。

また否定的批判が、一一月五日の西ベルリンはズィークムンツ・ホーフでのハイムの朗読会にあったとするなら、と西ベルリンのSED機関誌『真実』からの証言を引用する。これもハイムを擁護するものであり、批判するのものではなかった。また一一月二二日から三〇日の間に、さまざまな西ドイツの町で開かれたハイムの公開朗読会と討論会に関してはどうか。DDR、特にハイムに対しては好意的でないブルジョワ報道に発言してもらえば、

ダルムシュテッター・エヒォー

……われわれは質問をして、一人の確信的コムニストに、大失敗を認めさせようとした。しかしかれはわれわれを喜ばせるようなことはしなかった。どんな矛盾も巧みな論理で説明した……

ダルムシュテッター・タークブラット

ハイムは…社会主義をまさに自分自身の心にかかわる要件であると擁護した…聴衆は、たとえかれが自分たちとは異なったことを考えているにせよ、それを誠実に考えていた一人の男と、一度語り合うことができたのを感謝してしかるべきだった。

ミュンヒェナー・メルクーア

ハイムは自分の社会参加を否定せず、またかれが「その市民である国家の」事実批判的擁護者としての実を示した。ハイムは機知に富んだ、折目正しい討論参加者だった。

ハノーヴァーシェ・プレッセ

かれはしかし、決して完全だとは思っていない国家の、確信的な市民の一人である。かれはこちらに出でてくることで、ＤＤＲを訪問する多くの者たちが気づいたことを立証した。すなわちＤＤＲ国民の強まりつつある意見である。

次の、西へ出かけたのは小説『Ｘデー』を宣伝するためであり、この小説は、六月一七日事件を完全に誤って表現しているがゆえに、許可できなかった、ということについてはどうか。これにはハイムはこう答える。

「世界に名の知られた社会主義のある作家が、世界に知られた事件についてのある小説を書き、この小説がある社会主義国で許可されない場合、この作家はその本をもはや宣伝する必要はないのです。つまりその本は自動的に世界の関心のまとになるからです。」

また表現が誤っているかどうかについても、名はあげないが、指導的な人びとの一人からの手紙をハイムは引用

する。

「これは言葉と描写が、途方もない力で書かれています。心理学的な傑作であり、高度に真実を含んだ内容、また、かつてあの六月一七日の周囲にいた人びとばかりではないが、そうした人びとの思考方法、行動様式へ人を引き込む真にすばらしい力を持った、一級の歴史ドキュメントです。……そういうわけで、あなたは人間を（たんにわれわれの人間ばかりでなく！）真にはっきりと友と敵に見分け、それで人間に――個々の人間に――自分が誰に属していると思っているのか、誰の仲間になりたいのか、という選択を迫りました。あなたの作品はまた、そしてそれゆえ、社会主義的ヒューマニズムの新しい古典作品のひとつになるでしょう。」

さらに、ハイムが西側で出ている雑誌や新聞に、ソ連やＤＤＲの生活を誤って描き出し、真実をのみ擁護すると称しているが、実際には、労働者階級ではなく、ただ作家と科学者だけが、新しい社会を指導する資格がある、と主張していることに関してはどうか。要するにこの点がホーネッカーら党指導部にとって一番の問題であったろうことはうなづけるが、該当する論説『ミンスクの退屈』を全文読み上げたあとで、正常な、先入見のない読者なら、このエッセーの西側での、あるいは東側、北側、南側での発表に異議を唱えることなどありえない、とわたしは思っている、と明言し、重ねて、このエッセーは、最初は西側でなく東側で、しかもチェコスロヴァキアの雑誌『クルトゥルニー・ズィヴォト（文化生活）』に、六五年八月二〇日に発表されたものであり、その後西側で、八月二六日にフランスの共産主義雑誌『レットル・フランセーズ』に、さらに九月二五日、イタリア共産党の雑誌『リナシタ』に、その後一〇月二九日になってようやく、ハンブルクの『ツァイト』紙に、それも国家評議会議長ヴァルター・ウルブリヒトの公式声明をのせた同じ週刊誌に発表することが、いったいどんな犯罪だというのか、と反論を締め

くくっている。②

恐らくホーネッカーは、『ミンスクの退屈』を読まなかったのであろうし、ハイムによって明らかにされた事実関係もくわしくは知らなかったか、もしくはこの報告を起草した者が不勉強だったのであろう。でなければ、右に見たように、ハイムに逐一論駁されるような杜撰な批判文が書けるはずがない。これはつまり、中央委員会総会あての政治局報告といっても、必ずしも全部が全部正確な事実関係に基づいて書かれているとは限らないことを、はしなくも物語っている。

こうして党史が書かれ、ひいてはＤＤＲ史が出来上がってゆく。党は常に正しい、のであって、誤りがあるかどうかの議論はしないのだ。要するに党路線とは少しでも異なる、あるいは批判的な言辞、党の指導する社会の否定的側面を描き出すような芸術作品は許さない、という事実を天下に知らしめることが肝心であって、その内容が正しいかどうか、事実に合っているかどうかは問題でないことを、ハイムらに対するこの一連の批判は示しているといえるのだ。

注

① Bericht des Politbüros an das 11. Plenum des ZK der SED, vorgetagen von Erich Honecker. Dokumente zur Kunst, Literatur und Kulturpolitik der SED. Seewald 1972. S.1078.

② Tatsachen und Dokumente, Rede vor der Vollversammlung des Berliner Schriftstellerverbandes. Wege und Umwege. S.308ff.

三、

さて、問題の『ミンスクの退屈』についてである。妙なタイトルだが、B・ブレヒトの家に呼ばれたハイムが、五四年の第二回ソ連作家会議に出席した時の印象について聞かれた際に、ブレヒトは、ソ連の連中がまた文学と呼べるものを持つのは、ミンスクは世界で最も退屈な町だ、という言葉で始まる小説が現れるときだ、と言ったところからきている。退屈なら退屈と書け、すなわちブレヒトの要求したのは、リアリズムであった。

「ある男が悪党なら、その頭に後光を置くな。生活が、新聞や旅行社がきみに言うとおりでない場合には、きみは小説家、劇作家、詩人であるのだから、それをはっきりと口に出すのが、きみの義務である。というのは、これが、これのみがリアリズムという言葉の意味だからだ。」①

ある男が誰を、新聞、旅行社が何を意味しているかは言うまでもない。ある男に後光を置こうと、新聞が何と言おうと、リンカーンが言ったように「一部の人びとをずっとバカ扱いすることはできるし、すべての人びとを一定の時間バカ扱いすることもできるが、すべての人びとをずっとバカ扱いすることはできない」のだ。真実とはそうしたものであり、「結局は勝利をおさめる、という性質を持っている。」②そうした真実を口に出すのが作家の役割だ、とブレヒトは強調したのである。これに鼓舞されてハイムは、冒頭からリアリズムの意義を強調することによって、SEDのあり方に真っ向から批判をあびせ、無謀にも党の指導的役割を否定する文章を発表したのである。ハイムの主張をまとめてみよう。

まず第一に、作家たる者はリアリズムの眼を持って真実を描き出せ。真実は偽装のマントをつらぬいて輝き、最

後には勝利をおさめるという性質を持っている。第二に、どの時代にもその代弁者がいるものだが、こんにち核と革命の時代においては、それは作家と自然科学者である。作家についていえば、かれに力と責任を負わせるのは言葉である。言葉からしか織られない道徳的資格というマントに包まれえない権力とは何か？作家の言葉の影響力は、直接の行動という基準によってではなく、むしろ人間の心に内在し、しばしば数年後になって、思いもかけず爆発的に現われてくる間接的な働きである。第三に、言葉に内在するこの特性を恐れる権力者は、作家や知識階級に対してアメとムチを行使し、あるいは検閲に走ったりする。第四に、タブーのない国はない。真実を書くこと、リアリズムを妨げているのがタブーなのだ。外的要因のほかに、まだ権力の行使に不慣れな階級のさまざまな困難に由来するタブーがかなりある。第五に、それにもかかわらず、真実とリアリズムは、タブーが取り除かれることを要求している。これは複雑、繊細な神経を必要とする手術だが、残忍な行為、抑圧、利己主義、権力欲は、社会主義の組織的構成要素ではないことを自覚して行なわれねばならない。第六位に、真実は革命的であるがゆえに、作家たるものは、こんにち、革命、平和、人間性、正義の側に立たねばならない。第七に、革命の偉大な諸原則に対するどんな違反にも、われわれは声をあげねばならない。最後に、西側の同僚に比べてはるかに好都合な状況にあるわれわれ社会主義の作家たちは、道徳的に振舞うことによってのみ、全世界的な変革のための巨大な力を生み出すであろう。これらが主張の要点である。

たしかに、これはもはや歴史的文書であって、こんにちの視点から読み返してみれば、どうということもない文書だといえなくもない。リアリズムの定義にせよ、作家の言葉の影響力の問題、権力者のふるうアメとムチや検閲の問題にせよ、ビロード革命にいたるチェコの現大統領ハヴェルの活躍を思い浮かべてみるだけでも、その真実性

が実証されているというものだ。党の指導的役割の否定といっても、厳密にいえば、否定した訳ではなく、その問題とは別に、現代という時代をよく代弁できるのは作家と自然科学者だ、と言ったにすぎない。しかしなぜそうした文書が当時激しい批判を浴びることになったのか。

社会主義リアリズムという概念では、ミンスクが世界で最も退屈な町だ、とは書けない。これに象徴される種類のいわゆる社会主義のタブーは、本来のリアリズムと相入れないのは明らかであるのに、五六年のフルシチョフによるスターリン批判以後も、相変わらずこうしたタブーが存在することが、本来の社会主義の発展をさまたげている、とハイムは訴える。しかも本来の社会主義では、残忍な行為、抑圧、利己主義、権力欲はその組織的構成要素ではないことを自覚せよ、と要求した。

ＤＤＲ建国以前からの東ドイツの社会主義建設を指導してきたＳＥＤにしてみれば、その歴史を振り返るだけでも、すなわち、ドイツ独自の社会主義の道を否定し、レーニン・スターリン主義的社会主義へ転換してゆく過程で、どれほど多くの残忍な行為、抑圧等があったかは、他人に言われるまでもなく自覚していたであろう。党の理念の宣伝用のメガフォン、指令の伝導ベルト③くらいにしか考えていなかった作家ふぜいに、触れてほしくないところを突かれて面白いはずはない。

しかし党にとって決定的に許し難いと思われたのは、核と革命の時代を代弁するのは、作家と自然科学者である、とする点であったろう。労働者階級の党、その党の指導的役割が、憲法によって規定されてもいるその役割が、あっさりと無視されたのだ。事実上の一党独裁を根拠づけるこの規定を死守することは、党にとって至上命令である。それは二四年後の八九年にこの規定がはずされるや、一年たつかたたぬうちに党はおろか、ＤＤＲという国家その

ものさえ消滅してしまったことからもわかることである。これを無視する者など許しておくわけにはいかなかったのである。

しかしことがそれだけの問題なら、ハイム個人をたたいておけばすむことであったのに、党が芸術・文化方面の全線において一斉攻撃に出たのはなぜか。文芸界に対するこのような容赦ない干渉を行なった背景には、それなりの事情があったはずである。

注

① Die Langweile von Minsk, S.294f.

② ebd. S.295.

③ Brigitte Krump : Das rote Kloster, Eine deutsche Erziehung. Hoffmann und Campe 1978. にくわしい。

四、

ハイム個人とDDR当局との関係を考えてみる場合、ハイムがはっきりと反スターリン主義の立場を打ち出すきっかけとなった、五六年のソ連共産党第二〇回大会におけるフルシチョフの秘密報告にまで遡らねばなるまい。

この「個人崇拝とその結果について」のテキストを『ニューヨーク・タイムス』の紙面で読んだハイムは、「スターリンを神とは思っていなかったから、この神に離反を誓う必要はなかった」にもかかわらず、そのショックは大変

なものだった、と次のように書いている。

「お互いに決して合わさろうとしないジクソー・パズルの何片かが、幽霊の手によってのように、ぴったりはまり合ったかのようだったが、ただそこに現われた光景があまりにもぞっとする光景だったから、本当のことだとはわかっていても、最初は本気にしがたいものだった。というのも、以前には答えのなかった諸問題が突然に解けたり、いたるところで出くわす見かけのうえの不合理が、論理的な関連のなかにぴたりとおさまったからである。」①

ここにも、ハインリッヒ・ハイネのようにコムニズムの論理は信じていたが、スターリン本人を神のように崇拝したりはしなかったハイムの姿を認めることができよう。なぜなら神に対して疑問を抱くことは許されていなかったからである。コムニズムの導入は本当の楽しみとはならないだろう、とハイネは予言したという。②ハイネの『アッタ・トロル』で卒論を書いたハイムはその予言を知っていたのである。

ハイムは見かけは民主主義的社会主義者だが、その本質はＤＤＲ体制擁護と独裁者スターリン賛美者だ、とする『シュピーゲル』の無署名記事がいかに粗雑なものであるかについては別稿で扱ったので、③ここではくり返さない。しかしハイムの言動からその本質を読み取れないようでは無署名記事しか書けないのもいたしかたあるまい。

スターリン主義すなわち悪、とする立場からすれば、多くのドイツ人はそう考えているが、悪質なスターリン主義者などというのは同義反復であって、質の良いスターリン主義者なんてありえないことになる。要は本質的にスターリン主義者であったか否かであるとすれば、ハイムすなわちスターリン主義者説はやはり当たらないとせねばなるまい。五二年の東独帰還以来の数年間、精力的にＤＤＲ体制擁護の論陣を張ったという理由だけでは、ハイムを非難することはできない。

「こうしたコムニズムに張りついていた汚れと血が、とってかわることになっていた資本主義をはるかに人間にやさしいものにしたのではないか、というあまりにも単純で自明でありながら、しばしば脇に押しやられていた疑問が、第二〇回大会以後の時代における作家ハイムの行動を決定した」のである。④

つまり五六年以前と以後では、ハイムの言動は明らかに違うのであり、この疑問をつきつめていった結果が、六四年一二月一日から五日にかけて東ベルリンで開催された「東西ドイツ文学についての社会主義諸国国際作家コロッキウム」の席上で行なわれたスピーチ『スターリン退場す』なのである。スターリニズムの残滓を洗い落とし、社会主義を栄光の中に再生させるにはどうすべきか、を内外に明らかにした宣言である。

さらに、非スターリン主義の徹底という重い課題を党につきつけたハイムは、一年後、リアリズムに基づいた自立した作家の革命的役割を強調して、党の指導的役割の否定にまで立ちいたったのが、先に述べた『ミンスクの退屈』である。

ハイムに、その根幹をなす指導的役割の否定という匕首を喉元に突きつけられた党が反撃に出たのは当然のことである。ハイムにしたところで、この地点にいたるまでおよそ九年という長い年月を要したのだ。その間にさまざまな逡巡があり、党との関係もしだいにぎくしゃくしたものに変わっていったのも、また当然のことであったろう。

たとえば、五六年二月のスターリン批判直前の一月に開催された第四回ドイツ作家会議でのハイムの『作家と権力』と題する演説では、自分は作家の言論を統制するような国では仕事はできないし、しようとも思わないが、そもそもこの国には言論統制も検閲もない、検閲官は作家の心の中にいるのだ、⑤と非常に楽観的な展望が述べられている。自分たちは新しい、まったく別の支配階級の一部、すなわち権力の側にいるのだから、これを奪い取られな

いようにする責任がある、と権力との一体感さえ表明されてもいる。しかしだからといって、文学作品を判断する際には、社会主義国でよくあるように、作者の意図とか人間的資質、また功績や地位といったものは考慮すべきではないし、主題が何らかの意味でいいからという理由で、文学の水準を下げるのを許すわけにはいかない、と文学プロパーの立場から釘をさすことを忘れていない。

「われわれは批判や、大小の権力者たちのあげる人差し指や眉毛を恐れたりはしない」「問題は、いかにして現代の人間、わが国の人間を描き出したらいいのか、ということであり」「われわれの課題は、自分たちの全責任を自覚して、われわれの人間と人生を、そのすべての多様さと矛盾に満ちた発展のなかに描き出すことである」⑥

まだDDR社会主義で、ハイムの考える社会主義が実現しうると考え、社会主義建設、社会主義芸術の製作に情熱的に取り組んでいる様子が見て取れよう。何を描くか、どう描くかは作者の心の検閲官の問題であって、外部の検閲官恐れるに足りず、というあまりにも楽観的な態度表明は、DDR移住後四年足らずにして、DDR社会主義の現実をその本質のところで知らなかったのだ、と言わざるをえない。

スターリン死後の五六年、メーデーのデモに労働者といっしょに参加して、かれらの生活ぶりをいろいろ尋ねたところ、何も知らないのを不審がられ、いや、アメリカ出身の作家だというと、じゃ今聞いたことをみな書いてもらおうじゃないか、と言われる。アメリカでは出版してもらえないんだ、と答えると、この国でだって、現実を有りのままに書けば出版してもらえない、と言ってやれよ、と言われたというエピソードが自伝に書かれている。⑦ハイムは本当に知らなかったのである。

そんなこともあってか、ハイムの書くものは常にSED中央委員会情宣部の意見を述べているのだ、とさえ西べ

ルリンの新聞『モルゲンポスト』（五五年一月一二日）に書かれたこともあったようだ。[8]

たしかにこの頃ハイムは、自分の信じる社会主義の確立のために大いに発言している。五三年六月一七日事件直後から書き出されたジャーナリズムでの仕事は、二冊の論集『頭はきれいだ』と『はっきり言えば』[9]にまとめられているが、それらは二冊合わせて七五七頁にものぼる。最後に収められているものが五六年一二月二四日の日付であるから、およそ三年半の間の仕事である。

このジャーナリズムでの仕事は、当時のハイムの思想と行動を知るためにも、いずれ詳しく検討されなくてはならないであろう。ハイムがＳＥＤ中央委員会の代弁者であるかのごとく言われたほどに勢力的にジャーナリズムでの仕事ができたのは、ＤＤＲ社会主義のスターリン主義的性格をその本質的なところで知らなかったからだ、という事情だけではもちろんあるまい。

若くしてプラハでの短期滞在をへてアメリカ合州国へ亡命し、米軍の心理作戦将校までつとめたハイムのキャリアは、まがりなりにもアメリカ流デモクラシーの何たるかをかれに知らしめたにちがいない。スペイン内線に参加したり、ソ連に亡命してスターリン流社会主義の内実を知った社会主義者が、戦後のＤＤＲでその発言が慎重にならざるをえなかったのと、ハイムはキャリアを異にしているのだ。

従ってハイムの発言が、イデオロギーにとらわれガチガチの公式路線にのっとった発言と比べると、はるかに柔軟であることは言うまでもない。だいたいアメリカ資本主義の否定的側面を例にあげて、社会主義の美点を擁護することの多いハイムだが、その硬直した思考ぶりを批判する余裕もあった。

西ベルリンの若者たちのジーンズを、東側でまねしてはくのはけしからぬ、という風潮に対し、いやジーンズは

もともとアメリカの労働者や農民のはく、丈夫で長持ちし、かつまた安い労働パンツであり、そうした利点を持つものを取り入れるのを恐れる必要なない、資本主義者たちは、自分の利益となるなら東側のものひそかに学び取るのを躊躇したりはしない、と主張したのはその一例にすぎない。[10]

この時代といえども、西側の言うようにＳＥＤの提灯持ちばかりしていたわけでは決してない。だいいちハイムがナチス時代以来夢見てきたのは、本来のあるべき社会主義であって、戦後ドイツの大地に初めて社会主義を標榜する政権ができた以上、社会主義者としてそれを支援するのは当然の行為であったろう。またＤＤＲ社会主義のスターリン主義的性格に気づくのが遅れた点も、遅れて（五二年）帰還したものとしてはいたしかたあるまい。四八年の時点でスターリン主義的変質に見切りをつけてユーゴに脱出したＷ・レオンハルトなど例外中の例外である。[11]それとてウルブリヒト・グループの一員としてドイツに帰還し、常に党の中枢にいたからこそできたことである。ソ連亡命中コミンテルン学校で教育を受けつつ、母親の逮捕というスターリンによる大粛清の時代を肌身で体験したという背景があったればこそ、ＳＥＤのスターリン主義的変質にすぐ気づいたのである。

ハイムにはもちろんそうした背景はなかったが、そのかわりアメリカ流資本主義のプラスとマイナス面を十分に体験する時間はあった。アメリカでの生活に見切りをつけ、ヨーロッパへ帰還したのも、マッカーシズムの魔の手からのがれるためであった。スターリン主義的ＤＤＲ社会主義をその実体をよく知らぬまま支援したことを自己批判して以来、その何倍もの年月をＳＥＤのさまざまないやがらせや迫害に耐えつつ、ＤＤＲ社会主義の内から、西側世界を体験した者として、より広い視野に立って批判をくり返し、本来の社会への立ち返りを願っていたハイムが、ＤＤＲ崩壊への過程にあずかって力があったことをわれわれは認めねばなるまい。

またＤＤＲの外にあって、ＤＤＲ社会主義に対し警鐘を鳴らしつづけ、ソ連及び東側ブロックの崩壊（実際の崩壊は予測よりも早かったとはいえ）を八四年には予測することのできたレオンハルト[12]のような社会主義者の働きも、ＤＤＲ社会主義史の中に正当に位置づけていかねばならないのはいうまでもない。

そうした観点に立てば、このような運動をした社会主義者ハイムを、一時期スターリン主義的社会主義のＤＤＲを支援したという理由だけでもって、悪質なスターリニスト呼ばわりをするようなことは、一流誌『シュピーゲル』のすべきことではないのだ。

さらにハイムについて忘れてならないのは、かれは生涯にわたって無党派をつらぬいていることだ。ＳＥＤ中央委員会の代弁者とまでいわれるほど社会主義擁護の論陣を張ったこともあるハイムはＳＥＤ党員ではなかった。なぜ入党しなかったか。

プラハ亡命時代すでに反ナチ活動ゆえに、チェコ陸軍プラハ地区司令官からプラハ警察署長にあてられたブラックリストの、危険なドイツ人コムニストの三番目にリストアップされ、しかもウルブリヒト（七番目）より上位に位置づけられたこともあるハイム、[13]また「四五年九月ないし一〇月の『ノイエ・ツァイトゥング』紙（終戦後ミュンヒェンでハイムは発行・編集に参加した）の論説以後…わたしは新たにつくられたヴュルテンベルク州の州政府から、政務次官として政府に参加できないかどうか、という問い合わせの手紙をもらった」[14]こともあるハイムである。

このように政治家としても多分に才能があったであろうハイムが、あえてどの党の党員にもならなかったのには、ハイム自身はっきりとした理由はあげていないにせよ、それなりの覚悟があったにちがいない。恐らく文学者、作

家としての立場をつらぬくには、信条の自由を確保しておく必要があったであろう。民主集中制を取る共産主義的政党にあっては、党の意向に反した態度表明はできないのはいうまでもない。もしハイムが党員であったなら、その活動歴からいって党規約違反のかどで除名処分となり、ハイムの意見など修正主義者の戯れ言として容易に無視されてしまったであろうことは確実である。党員として処分できないがゆえに、ハイムの家の前に警官を配置し、かれの動向を監視したり、西側で出版された小説『コリン』に関して、東の著作権事務所を通さなかったというだけで、外為法違反を口実に法廷に引きづり出したり、というあらゆるいやがらせでもってかれの意見を圧殺しようとして、ついにできなかったＳＥＤが結局は自滅していった過程を見てくると、非党員という立場がいかに重要であったかがわかるというものである。

その点作家同盟会長のヘルマン・カントなどの党員作家とは決定的に違う。ハイムはそうしたことを見越して、戦前のナチス時代から一貫して非党員の立場をつらぬいてきた。こうした自由な立場を確保することによって、「堕落したタイプ」呼ばわりされたとはいえ、狭い意味での「転向者」などというくだらぬレッテルを張られずにすんだのである。こうした態度はブレヒトなどとよく似ているが、両者ともユダヤ人という出自からいって、状況に対する何か本能的なセンスといったものを持ち合わせているのではないかとさえ思わないわけにはいかない。

注

① S.Heym: Nachruf. C. Bertelsmann 1988. S.600.

② ebd. S. 602.

③ 一、の注⑤参照

④ Nachruf, S. 602.

⑤ Der Schriftsteller und die Macht, Wege und Umwege. S. 271.

⑥ ebd. S. 272 ff.

⑦ Nachruf, S. 562.

⑧ Ich habe in Ungnade, Wege und Umwege. S. 240 und Ich und Zentralkomitee. Heym: Offen gesagt. Neue Schriften zum Tage. Volk und Welt 1957. S. 37

⑨ Heym: Im Kopf -- sauber, Schriften zum Tage. Paul List 1954. und s. ⑧

⑩ Offen gesagt, S. 61 f. Wege und Umwege, S. 243 f.

⑪ Wolfgang Leonhard: Die Revolution entläßt ihre Kinder. Wilhelm Heyne, Heyne-Buch Nr. 7090 に詳しい。

⑫ W. Leonhard: Spurensuche, 40 Jahre nach Die Revolution entläßt ihre Kinder. K & W 1992. S.13 f.

⑬ Nachruf, S. 90 f.

⑭ Über »Wege und Umwege«, Heym: Einmischung, Gespräche. Reden. Essays. C. Bertelsmann 1990. S. 110

五、

さて、五六年のスターリン批判から六四年の『スターリン退場す』、六五年の『ミンスクの退屈』にいたる間に、ハイムのＤＤＲ社会主義に対する認識の変化に影響を与えたであろう内外の出来事は何であったろうか。

フルシチョフのスターリン批判によってもたらされた東側陣営の緊張関係のなかで、五六年六月に、ポーランド

はポズナニでの労働者蜂起、続く一一月にはハンガリーの人民蜂起がイムレ・ナジを首相に返り咲かせ、ワルシャワ条約機構からの脱退、中立化を宣言するも、ソ連軍によって踏み躙られる。

またこの人民蜂起のなかから、「反革命の首魁」ゲオルク・ルカーチをブダペストから東ベルリンへ救い出そうとした文学者グループのなかで、アオフバオ出版社の社長ヴァルター・ヤンカが反革命的陰謀を企てたとのかどにより、一二月六日に逮捕される。さらにその直前一一月二九日は、ＤＤＲを非スターリン化し、ウルブリヒトの追い落としをねらったヴォルフガング・ハーリヒ、ベルンハルト・シュタインベルガー、マンフレート・ヘルトヴィヒ等のグループが逮捕されており、翌五七年三月にハーリヒは一〇年、七月にはヤンカが五年の懲役刑に処せられている。のちの七九年にハイムは、このヤンカをモデルの一人にした小説『コリン』を書くことになる。①

いつまでも熱い粥の回りでおしゃべりしているわけにはいかない、つまり肝心な点を避けてはいては話しにならないとして、まだ熱くて誰も触れようとしないＤＤＲ現代史の闇の部分にあえて手をつけるという気概をハイムは示してみせたのである。

もちろんこの小説はＤＤＲでは発表できず、西側でのみ出版されたが、その結果、東の著作権事務所を通さず、不法に外貨を得たかどにより、つまり外為法違反により罰金刑を科されているが、これはまた別の話しになる。

五八年二月の三五回中央委員会総会では、カール・シルデヴァンとエルンスト・ヴォルヴェーバーは敵対的分派活動ゆえに、中央委員会から除名され、かれらを支持したフレート・エルスナーは政治局員を解任される。

そして六一年八月一三日、ＤＤＲは「目の前に迫った崩壊を回避するために、最後の非常ブレーキとして」ベルリンの壁の建設を強行する。「境界線をそのような思い切った手段で確保せざるをえない国内的原因を除去するた

め」[2]である。

国内的原因とはもちろん、労働力の、特に若い世代と専門職の西側への流出であった。こうしたＤＤＲ社会主義統制経済体制の失血死をくい止めた「八月一三日は、ＤＤＲの歴史学ではもっぱら、平和と社会主義の勝利として、また社会主義に有利に変化した世界の権力関係の表われとして評価されてきた。それは少なくとも非常に一面的な評価であった。六一年八月一三日は同時に、ＳＥＤの社会主義的経済建設に関するこれまでの考え方が失敗に終わったこと、別の社会体制に国境を開く社会主義的社会が破綻したことの表われであった」[3]のである。

国民を壁によって封じ込めたからには、その不満が体制に向けられぬよう、少なくとも体制に順応するように仕向けるために、この経済的苦境を打開し、労働者の物質的関心を刺激して労働生産性を高める必要があった。

こうした経済改革の構想、すなわち「計画と指導による新経済システム（ＮＯＳＰＬ）」の導入が六三年六月に決定される。国家計画委員会によって作成された年次計画は、人民所有企業の連合体の指導のもとに、「物質を資金調達、国内外取引におけるイニシアティヴ、ならびに価格と販売の問題に関する包括的全権を企業が独自に持ち、システムをより融通のきくものに変えようというのである。このシステムの核心は〝経済的テコのシステム〟であった。この〝テコ〟すなわち自己負担、価格、利益、負債、賃金、賞与が、統一したシステムを形づくるように相互に調整されなければならないとされた。その際中心点に置かれたのが個々の労働者、企業の〝物質的関心〟であって、〝利潤〟や〝資本主義的〟刺激が業績向上へと駆り立てるというのである。」[4]

しかし計画遂行の指令型システムと、各企業、労働者の〝物質的刺激〟とをもとにした労働作業との矛盾は当然ながら解決できない。またソ連との経済関係が緊密化され、ソ連の利益がますます優先されるのを見て、経済問題

担当の政治局員エーリヒ・アーペルは、このシステムの前途を悲観して六五年一二月に自殺する。「SEDのトップが、このシステムを長期間続けると、中央集権的・ピラミッド型の指導体制が問題となってくると断定したとき、党の経済政策は一九六五年末に〝第二期〟に入った。いまや〝新経済システム〟は強力に中央集権化されていくようになったのである。」⑤

それでもこうしたシステムは経済状況の改善に役立ち、生活水準の向上をもたらすとともに、社会主義的能力主義社会、消費社会への基礎が築かれてゆくことになる。

また経済の安定とともに、文化的側面でも一時的な雪解け期があり、六三年には、ヴォルフ・ビーアマンのような体制批判的詩人にも活躍の場が与えられていたが、六四年三月にはフンボルト大学のローベルト・ハーヴェマン教授が、党路線からの逸脱を理由に党を除名され、大学教授の職を失う。経済が一応の安定を見たと受け取った当局が先手を取って、イデオロギーの引き締めに乗り出したのである。

こうした延長線上に六五年の第一一回中央委員会総会がやってくる。新経済システムの第二期入りを決め、経済政策を実質的変更し、文化の面でも再び引締め路線に転じ、先に述べたごとく、ビーアマンやハイムらが激しく攻撃されることになる総会である。

注

① S.Heym: Collin. C. Bertelsmann 1979.

② Horst Grunert : Aspekte internationaler Entwicklung. Kahlschlag. S.16.

③ ebd. S. 22.
④ ヘルマン・ヴェーバー著『ドイツ民主共和国史』斉藤哲・星乃治彦訳、日本経済評論社　一九九一年、一〇六頁
⑤ 同書、一〇七～一〇八頁

六、

さて、こうした時代経過を見てくると、スターリン批判の衝撃以後のさまざまな動きが、当然ながらハイムの思考に重要な影響を及ぼしたであろうことは想像に難くない。

五六年二月のスターリン批判後の三月四日には党機関紙『ノイエス・ドイッチュラント』に、「しかしながらスターリンがみずからを党の上に置き、個人崇拝にふけったとき、ソ連共産党とソ連国家に重大な損害が生じたのである。マルクス主義の古典にスターリンを数え入れることはできない」と宣言したウルブリヒトではあったが、五三年六月一七日事件以後、ヴィルヘルム・ツァイサーやルドルフ・ヘルンシュタットを排除し、アントン・アッカーマン、ハンス・イェンドレッキー、エリ・シュミットを中央委員会から追放してきたかれのスターリン主義的手法は、五六年以降も変ることはなかった。

もちろんこうした権力内部の争いにも、ハイムは大いに関心を抱いたであろうことは、ジャーナリズムの仕事を通じて時事問題に積極的に発言していたハイムのことを考えれば、うなずける。だが本来作家としてのハイムにとってより重大な関心があったのは、ハーリヒやヤンカに代表される批判的知識人に対する一連の弾圧事件であったろ

う。自らの身に引きつけて考えてみるとき、容易に看過することのできない問題であったにちがいない。

これらの知識人弾圧事件はもちろん、DDR個有の出来事ではなく、当時の東欧圏のスターリン批判以後の自由化の流れに対する、体制側からの反撃、引き締めの一環であり、チェコスロヴァキアやハンガリーにおけるほど残虐でなかったとはいえ、スターリン主義的見せしめ裁判であることに変りはなかった。

ハイムがこれらDDR現代史に深く関心を寄せ、それがのちの七九年に小説『コリン』に結実し、ハイム自身の弾圧事件を引き起こすことになったのも、先に六月一七日事件をもとに小説『六月の五日間』[1]を書いたものの、DDRでは出版が許可されず、西側で出版されたとはいえ、当局から激しく批判されることとなった状況と、事情は全く同じである。

その昔、ナチスをからかった詩を書いてギムナジウムを放校となり、亡命先のアメリカでは朝鮮戦争に抗議して、米軍の将校タイトルや勲章類を大統領に返上するなどの経歴からもわかるように、ハイムはその性格からして同時代史に無関心ではいられないのである。自伝には「自分には子供時代に起因するにちがいない、正当なことと不当なことに対するセンス、そして抑圧的な権力に対する嫌悪感があった」[2]とある。しかも多くの知識人が沈黙しがちな時にあっても、自分の信条を何らかの形ではっきりと表明するハイムは、その時の当局にとってやっかいな存在となるのは当然であったろう。

さて、「ヤンカ・ハーリヒ事件」とは何であったか。わが国にも六一年には紹介されているが、それはDDR当局の見解に沿って事件の概要をスケッチしたものである。[3]その主旨は、「ハンガリア事件についで、それとの直接の関係においてドイツ民主共和国に起こった諸事件は、一言にしていえば、オト・グロテヴォルを首相とし、ドイ

ツ社会主義統一党の第一書記ワルター・ウルブリヒトを第一副首相とする政府を転覆しようとする政治的陰謀事件であった。が、しかしことはイデオロギー的な意味をもっていた。それはスターリン主義または修正主義という問題にかかわっていた。」④という文章に表われている。

確かに現象的に見れば、時の権力者ウルブリヒトを排除し、党の路線を変更しようとする試みではあったが、紹介者の言うように、ことはイデオロギーに関する問題、つまりあくまでスターリン主義でいくのか、非スターリン主義に転換するのか、の問題であった。

現実的にソ連共産党の路線に従わないものを修正主義と呼び、弾圧し、迫害してきた歴史をふり返ってみれば、紹介者がハーリヒ・グループの路線を、いまとなってはなつかしい修正主義と呼ぶ気持ちもわからないではない。正統はあくまでも社会主義統一党の路線、しかもスターリン主義を清算できない、しようともしない党が正しいと信じているからである。このグループが強調した、スターリン主義を解消しようということの歴史的意味を、全く理解していないのである。いきおい、「反国家の陰謀団結成」の動きにばかり紙面がさかれてしまうのも無理はない。

しかし、ＤＤＲ建国以前に、党路線のスターリン主義への変質に耐えられず、ユーゴへ脱出したレオンハルトの評価は、これとは違う。二〇年代にその源泉をもち、四八年以降のチトーのユーゴ、五六年の「ポーランドの一〇月」およびイムレ・ナジとペテーフィ・サークル、ルカーチなどのハンガリー人民革命へと続く改革派共産主義の思想の流れのなかに位置づけるのである。「改革派共産主義の発展にとって典型的でもあり、特に重要でもあるのは、東ドイツにおけるヴォルフガング・ハーリヒの指導する反対派である。」⑤

ソ連共産党第二〇回大会以降、「真理の爆発」⑥と呼ばれるように、東欧諸国はもちろん、西欧諸国のコムニスト

たちの間にも澎湃として起こってきた、スターリン型の官僚主義的、中央集権的独裁を、社会主義的民主主義に変革することを主要目的とする改革派の試みは、それらは現代修正主義と弾劾され、ことごとく流血のうちに圧殺されたとはいえ、六八年の「プラハの春」を経てゴルバチョフの時代に立ち至った。そしてスターリン主義を文字通り修正するこれら改革派共産主義の歴史的発展が、八九年から九一年にかけてのソ連型のスターリン主義的社会主義体制の崩壊に大いにあずかって力があったことは疑いない。

だとすれば、ハーリヒ事件が東独一国の「反国家陰謀団」事件などといった次元の問題ではないことくらいは、少しでも自らの頭脳で物事を判断しようとする人間ならば、容易に理解できたであろう。もちろんウルブリヒトも自分の立場を理解できた。だからこそ、自らの党内における権力を維持するためには、ハーリヒ・グループを逮捕せざるをえなかったのである。

この裁判の傍聴席には、ヴィリ・ブレーデル、アンナ・ゼーガース、ボード・ウーゼ、女優のヘレーネ・ヴァイゲル（ブレヒトはこの時すでに亡くなっていた）らがいた。かれらは沈黙した。なかでも事件に深く関与していたゼーガースと、当時の文化大臣ヨハネス・R・ベッヒャーの沈黙を、事件の当事者の一人で四年間をバオツェンの獄中で耐えぬいたヴァルター・ヤンカは、九一年に出版された回想録において、鋭く告発したことは人びとの記憶に新しい。⑦

しかしながら、ハイムの回想録におけるこの事件に関する記述は、そう詳しいものではない。ヤンカとのアオフバオ出版社での出会いから、五六年のブダペストの騒乱の間に、ソ連軍の手からゲオルク・ルカーチを救い出そうとするベッヒャーの狂気じみた計画により、ヤンカがその実行者として選ばれた事実、ハーリヒとの結びつき、ま

たハーリヒの詳細な告白により、ウルブリヒトに対する陰謀、ならびに反ソヴィエト扇動、ＤＤＲにおける資本主義の再生を目的とする反革命的策動という形での国家反逆罪で五年の懲役刑を受け、四年と六週間をバオツェン刑務所ですごした事実を述べたあとで、そのヤンカが、例の第一一回中央委員会総会直後のある日、ハイムを訪ねて来たことを伝げている。[8]

ヤンカがやって来たのは、「自分自身の経験から、差し当たりはシェーンハオゼンのボレ商会のかつての倉庫の地下室における未決拘留中に、そしてその後のバオツェンで生きのびるためには、どう振る舞わねばならないか、いくつかの助言をハイムに与えるため」[9]であったという。

党機関紙『ＮＤ』でハイムほど攻撃されなくても、数年間刑務所へ入れられた人びともいるわけだから、いずれにせよ作家としていくらかでも現実を知っておくにこしたことはなかろう、というのである。ヤンカからすれば、ハイムはそれほど危ない立場に立っていたわけで、気をつけろと忠告しに来てくれたというわけだ。何と親切な男であろう。

ハイムは、ヤンカの述べた未決拘留中の詳細についてはもはやおぼえていないが、ただそれが一番必要なときに、況状下の圧力にまけて、その良き忠告を思い出せないかもしれぬことが心配だ、と言っている。[10]しかしこれはヤンカに迷惑をかけぬためのカムフラージュである。ヤンカの回想録の出るのはやっと九一年になってである。おぼえていないというのがカムフラージュであるのは、次に続く文章からもわかる。ヤンカの逮捕以来、秘密警察の連中も何か新しいことを考え出したのかも知れない。つまりより練り上げた尋問の方法、より洗練された脅迫の仕方、そしてとりわけどの人間も刺激にはそれぞれ異なる反応を示すわけだから、かれらの扱う誰にでも、その個性に応

じて違った態度を取るであろう、と推測を述べているが、これらがつまりヤンカの述べた内容なのである。ハイムはその詳細を忘れてしまったわけではない。尋問がおわり、判決が下され、懲役刑の歳月だけが残されるときに適用される諸規則、場合によってはヤンカのように独房に拘禁されるときの規則は、作家ハイムの記憶に永久に刻み込まれている、と書いているではないか。[11]

これらヤンカが語ったシェーンハオゼンの未決拘留からバオツェンでの刑の執行にいたる具体的描写は、七九年に西側でのみ刊行された小説『コリン』の中に再現された。これらの具体的描写が作家ハイムの想像の産物ではなく、真実であったことは、九一年にヤンカの回想録が出版されてはじめて明らかになったのである。

その一例としては、シェーンハオゼンの倉庫の地下ホールに、死後三年たってもスターリンの巨大な肖像画が壁にかけられている描写は、『コリン』では一九七頁に、同じ描写がヤンカの回想録では三一四頁に出てくる。ベルリンの壁崩壊以前の八八年に出たハイムの回想録では、ヤンカの実体験だとは書けなかったのである。しかし九六年に出版されたハイムの手記『われらが不満の冬』には、「かれの忠告は今でもなお記憶に残っている」「ヤンカに会うと、いつも心が温かくなる」と書かれている。[12]

そして、ヤンカの訪ねて来てからのち、ホーネッカーが第一一回総会で芸術家批判の報告書を読みあげて一週間もたたぬ一二月二二日午前七時半頃、ハイムの家のドアが叩かれ、内務省の大臣室に出頭すべしとの召喚状が手渡されるのである。召喚の目的は、「ある犯罪構成事実の解明のため」とのことであった。

注

① S.Heym : 5 Tage im Juni. Werkausgabe Bd.7 btb 1998.

② Nachruf. S.95.

③「東ドイツの知識人と修正主義―ハーリヒ事件―」一六七頁以下、『東ドイツの建設―人民民主主義革命の思想と社会主義』上杉重二郎著、北海道大学図書刊行会　一九七八年．初出は『思想』六一年三月．ちなみに事件の登場人物ベルンハルト・シュタイニガーとあるのはシュタインベルガーの誤り。

④ 同書一六九頁

⑤ W・レオンハルト著『岐路に立つ共産主義』高橋正雄・渡辺文太郎訳、読売新聞社　一九七七年．二五二頁

⑥ 同書二四〇頁

⑦ Walter Janka : Spuren eines Lebens. Rowohlt Berlin 1991.

⑧ Nachruf, S. 707 ff.

⑨ ebd. S. 708.

⑩ ebd. S. 709.

⑪ ebd. S. 709.

⑫ S.Heym: Der Winter unsers Mißvergnügens. Aus dem Aufzeichnungen des OV Diversant. btb 1996. S. 89. u. S. 140.

七、

こうしたＳＥＤ指導部の強硬路線は、第一一回中央委員会総会の直前に（一一月二五日）行なわれた、ウルブリ

ヒトと作家・芸術家たちとの話し合いにおいていっそう明確に示されている。話し合いといっても、当局と文学者たちの考え方の相違ははっきりとしていた。というよりはむしろ、危機感を強めた当局が総批判への最終的準備を終えて、文学・芸術分野における民主化は認められないことを宣告するための儀式であったようだ。[1]

中央委員にして文化問題担当副首相であったアレクザンダー・アブッシュと、同じく中央委員、国家評議会書記であったオットー・ゴッチェ、両者ともちろん芸術アカデミー会員、作家同盟会員であったが、この二人によって準備された作業グループに属していたのは、SED中央委員会文化部長ズィークフリート・ヴァーグナー、文化大臣ハンス・ベンツィエン、中央委員で芸術アカデミーの文学・言語擁護部書記のアルフレート・クレラ、中央委員でアカデミー機関誌『意味と形式』編集長であった。とすれば「これら文化管理官たちが、党と政府のトップに、それに中央の諸機関において持っているさまざまな権能は、かれらに文化のすべての分野に対する概観と影響力を保証しており、そのためにはかれらはそれぞれの機構の指導・監督・報告網を活用している」[2]状況からして、文化の分野も他の分野同様、完全に党のコントロール下に置かれていた。したがって「作業グループのメンバーたちはただの一度も、計画された話し合いのパートナー、すなわち作家や芸術家たちに、この話し合いにどんな期待をいだいているのか、あるいはDDRの国家元首に対してどんな質問があるのか、と尋ねてみようなどと考えたりはしない。またかれらの作品や読者の間でのその反響が作業グループで問題になることはない。重要なのは分析や意見の交換ではなく、前もって定められたイデオロギー的定理を裏づけることだ、というのがそれ以上の状況証拠である。」[3]

そのためには中央委員会文化部はDEFAの劇映画『俺が泣いているなんて思うな』（脚本マンフレート・フラ

イターク、ヨアヒム・ネストラー）や『私は小うさぎ』（脚本マンフレート・ビーラー）、舞台劇『モーリッツ・タッソー』（ペーター・ハックス）や『建設』（ハイナー・ミュラー）を激しく批判した文書を政治局に提出し、政治局は、ＤＤＲの青少年の発達における諸矛盾から生じる多くの現象について討議し、書記局情宣部は、西側のデカダンスを助長しないよう、また断固としてそれに立ち向かうよう求められる。さらに「話し合いの二日前に政治局は〝文化の分野におけるイデオロギーの諸問題〟というタイトルで、作家たちの財政と報酬、それに〝わが国の文化政策の最も基本的原則に違反する〟かれらの作品をコントロールすることを決定する。」④

要するに、金と芸術を結びつけることによって、党の意向に沿わぬような芸術家を経済的に締めあげるということであり、党の芸術理解の判断基準は、あくまでもイデオロギー優先である。こうした政治局の決定を、事実上すべての文化・芸術の分野で厳格に実施することを前提として、ウルブリヒト、ホーネッカー、ハーガー、アブッシュ、ゴッチェ、クレラらは、作家たちとの対話に臨んだのである。

もちろんクレラとしては、労働者階級出身以外のディエゴ・リヴェラ、アラゴン、マヤコフスキー、ベッヒャーなどモダニズム出身の芸術家、またかれらの先駆たるカフカやムジルにも理解があることを示そうとしたが、アブッシュは後者二人に対しては当然ながら激しく拒絶の態度を見せた。

事態がこうした美学論争の方向へ向かいそうなことを見て取ったウルブリヒトは、「党指導部の機能主義的な芸術理解を、荒っぽい経費対利益という図式に切り縮め、その図式によって経済的な力について解説しようとする。」⑤

そしてはじめて作品名と作者名を挙げ、ヴェルナー・ブロイニヒの『移動遊園地』を攻撃し、「いったいこんな

ものが誰の役に立つというのか？今日の青少年の教育に必要だというのか？」と本音を述べ、テレビのセックスプロパガンダを引き合いに出し、「こんなものを作家たちは今後もいっしょに作ろうと思っているのか？」「これが社会主義社会の現段階における人間のモラルなのか？」と決めつけ、「君たちの方がわれわれよりも欠陥がよく見えている、などというのは自己過大評価であり」「君たちの芸術様式の方がいいというのであれば、好きなようにしたまえ、わたしにとって大事なのは内容と目的だ」と警告する。こうした厳格な断定的意志表明は出席者たちにショックを与えたという。⑥

もちろんクリスタ・ヴォルフやアンナ・ゼーガースらによるブロイニヒ擁護、党の政策のプロパガンダ的攻撃に対して客観的事実に基づくよう求める反論もあったが、ウルブリヒトらは聞く耳を持たず、強引にグロテスクな結論へともっていく。

ハーガーは、「青少年に直接疑惑と懐疑的で否定的態度を教え込む」作品について語り、ウルブリヒトはその懐疑的態度という言葉をキーワードとして取りあげ、次のように主張する。

「一定の傾向、いやそればかりか、これは作家同盟というわけではないが、一定のグループが存在する。それは懐疑的態度を代表し、その政策を実行する時がやって来た、と考えているのだ。」さらに「懐疑的態度がプロパガンダされるようなことを認めることはできないし、それに労働生産性を六パーセント上げる、と計画に書き込むこともできない。もし懐疑的態度のプロパガンダを認めれば、労働生産性の上昇を一パーセント下げることになる。懐疑的態度とはすなわち、生活水準の多くを犠牲にさせるものだ。これは個々の国々で正確に予測することができる。」と。⑦

懐疑主義が広まれば、生活水準が低下する、という論理が素直に納得できるものは、そう多くはいなかったであろう。芸術上の問題と経済の問題を強引に結びつけて、経済がうまくいかないのは、おまえたち芸術家のせいだ、と責任転嫁の脅しをかけるようなやり方では、芸術家たちとの対話など成り立つはずがない。

しかしひるがえって考えてみれば、五三年の六月暴動以来、党指導部にとってみれば、経済問題の解決、すなわち人民の生活水準の向上をはかることは至上命令であり、六一年八月のベルリンの壁構築も、労働力の流出をくい止めると同時に、西側イデオロギーの流入、文化的浸透を防がずして、社会主義的生活の安定はありえない、ひいてはウルブリヒト政権の存続はありえないことを、党指導部は骨身に徹して認識していたはずである。そういう意味ではベルリンの壁はＳＥＤ政権にとっての、文字通りの防禦の壁であったことを考え合わせてみれば、とにかく壁で人民を囲い込んだからには、この中で疑念など抱かず、西側文化にかぶれず、まじめに働いてもらいたい、というのが本音であるのに、芸術家たちに懐疑だとか疎外だとか変な問題を人民に吹き込まれて、生産労働性を落とされてたまるか、かれらに絶対じゃまさせてなるものか、という気持ちになったとしても無理はないとも言えるのだ。

そんなわけで、ウルブリヒトの芸術と金という露骨な図式は、第一一回中央委員会総会の席で、ホーネッカーによってくり返し受け継がれていくことになる。

注

① Günter Agde: Zur Anatomie eines Tests. Kahlschlag, S. 128 ff.

② ebd. S. 129.
③ ebd. S. 130.
④ ebd. S. 133.
⑤ ebd. S. 136.
⑥ ebd. S. 136.
⑦ ebd. S. 140.

八、

さて、ここでウルブリヒトによって引用された「疎外というプロパガンダ」と「一定のグループ」について、少し触れておこう。

疎外のプロパガンダとは、六三年五月二七日と二八日の両日にわたって、プラハ近郊のリプリツェで開かれた一般にカフカ会議と呼ばれる国際会議に関連している。「チェコスロヴァキアとDDR、ポーランド、ハンガリー、ユーゴスラヴィア、フランスそしてオーストリアから来た学者たちが、社会主義国にとってカフカ文学はいかなる意味を有するか、カフカの文学技術は社会主義国の文学に応用されねばならないか、という問題に取り組んだ」会議である。①

この会議を中心となって支えたエドウアルト・ゴルトシュテュッカーの回想によれば、研究の際に何度も浮かび

あがった疑問は、なぜにカフカは公的立場から不倶戴天の敵とみなされたのか、ということであり、この問題の論理に入ることは、議論する際には、スターリンの社会主義リアリズムが持つ偏狭さと向かい合わねばならないことだったという。[2]

この「会議においてカフカ容認を巡る対立の図式が生まれた。即ち（エルンスト）フィッシャーや（ロジェ）ガロディたちの主張――社会主義にも未だ克服できない疎外が存在するから、批判的リアリストであるカフカはアクチュアリティを持つ――と、ＤＤＲ代表団、特に（ヘルムート）リヒターの主張――〝過去の遺物〟つまり滅亡に向かう資本主義社会に属するカフカ文学は、疎外が存在しない社会主義には無用である――の対立である。」[3]

もちろん、疎外の問題は社会主義だから存在しない、といった単純な断言で片づく問題ではない。社会主義の現実を日々の生活のレヴェルで、つまり本来のリアリズムの眼でもって見ている者は、そんな断言が嘘であることを知っている。ゴルトシュテュッカーのようにスランスキー事件に連座して逮捕され、ヨーゼフ・Ｋの、文字通りカフカエスク状況を身をもって体験した者にとっては、小説『訴訟』が架空の話ではなく、現実の世界であることを理解できた。

したがったピカソやカフカを従来のリアリズムの概念を拡大して理解することの必要性を強調したＲ・ガロディが、東側のカフカエスク世界を体験した者たちによって支持されたのは当然である。

これに対して、夕暮れになってから飛び回るこうもりと、夏を告げ知らせる燕とを取り違えるな、とガロディを揶揄批判した[4]Ａ・クレラのようなイデオロギーに凝り固まった文化官僚の言い分が、ＤＤＲ当局の公式見解であることは言うまでもない。

六五年にはカフカの『小品集』と『訴訟』および『城』がDDRでも出版され、文学者たちによってこれらの作品はDDRの現実を描いたものだ、などと宣伝され、人民の間に疎外意識が浸透し、ひいては党路線に批判的な勢力、つまり修正主義的イデオロギーが広まるのを当局としては極度に恐れたからである。

それは、六八年八月のワルシャワ条約機構軍のチェコスロヴァキア侵攻後の一〇月、DDRの文化相クラオス・ギズィの国家評議会での発言によってもわかる。「六三年リプリツェで開かれた国際カフカ会議は…（中略）チェコスロヴァキアの発展にとって命取りとなっただけでなく、この会議と共に――こう言って良ければ――〝武装解除〟されたマルクス主義、つまり修正主義を共通の基盤とした反社会主義運動の〝国際化〟が始まった。われわれはカフカ会議中も会議後もそれに戦いを挑み、それが国際共産主義運動の統一を強化しようとしているわれわれの努力にふさわしいと思われる限り、個々のケースにおいても公然と戦いを進めてきた。」⑤

つまり国際カフカ会議は、単にカフカをめぐる文学的論争の次元の問題ではなく、世界政治の次元で東側に仕掛けられた修正主義的政策の一橋頭堡と見なされていたわけである。さらに言えば、こうしたカフカ擁護に名を借りて、現実の社会主義的秩序に異を唱えようとする動きが、五六年のハンガリー動乱を用意したともいえる「芸術上、学問上の議論から国の全状況へと広がり、革命的雰囲気を創り出して行ったペテーフィ・クラブ」⑥のような「一定のグループ」形成へとつながることを恐れたからこそ、「個々のケースにおいても公然と戦いを進め」ざるをえなかった。だからこそ、ビーラー、ブロイニヒ、ビーアマン、ハックス、ハーヴェマン、ハイム、ミュラーらが、第一一回中央委員会総会で名指しで十字砲火を浴びたのである。第二のベルリン蜂起を絶対に再現させるわけにはいかない立場からも、「六八年八月のプラハ軍事介入を最も強く主張したのはウルブリヒト率いるDDR政府であったが、

そのような態度は五年前のカフカ会議への対応の仕方にまで遡ることができるのである。」⑦

注

① ヤン・ベルク他著『ドイツ文学の社会史』山本尤／三島憲一／保坂一夫／鈴木直訳、法政大学出版局　一九八九年、下八五五頁
② 細川正昭『カフカをめぐる戦い―1963年のカフカ会議』東京電機大学理工学部紀要 Vol.14　一九九二年、六九頁
③ 同　七一頁
④ 同頁
⑤ 同　七二頁
⑥ Hans-Dietrich Sander: Geschichte der Schönen Literatur in der DDR, Ein Grundriß Rombach, 1972. S. 155.
⑦ 細川　七二頁

九、

以上のような状況を見てくると、ＳＥＤ指導部が第一一回中央委員会総会で、なぜあれほど厳しい態度を取らなければならなかったのか、少しは理解できようというものである。すなわち、この「第一一回中央委員会総会は、とりわけ当時のＳＥＤ指導部が、権力の安定のために必要だったということで説明がつく。ＳＥＤの権力独占権が危機にさらされていると思われたからである。」①

この総会の性格をいえば、まさに右の言葉につきる。権力の正統性が疑われてはならなかったのであり、攻撃は最大の防禦なのである。そういう意味でも、この総会は「ただ単に経済のための総会でもなければ、文化のための総会でもなかった」[②]のである。というのも文学・芸術の関係者が重視する、筆者もその一人だが、文化・芸術の分野の特定の個人や現象、傾向に対する激しい攻撃と、その後の影響、そして経済関係者の重視する国民経済の計画と指導のための新経済システムが新たな第二段階を開始した総会ととらえる「両方の解釈は一面的で、とらえ方が簡約すぎるのであり、とりわけ当時のSED指導部の両分野の相互依存関係重視の姿勢を無視している」[③]からである。

下部構造が上部構造を規定する、というマルクス主義の原則からいえば、当然の評言だが、各分野の専門家は、自分の専門分野に引きつけて、現象を解釈しがちであるのも事実だ。現存社会主義諸国においては、極限すれば、芸術も政治なのである。換言すれば、芸術を解釈するのも、政治的解釈にならざるをえない。ハイムも言っている。「社会主義においては、作家たるものが沈黙したり、もしくはあるテーマを避けたりすれば、そのこと自体、すでに一定の立場を取ることを意味している」と。[④]

社会主義における作家の立場とはそういうものだと理解して、ここでもう一度ハイムにもどることにしよう。

さて、すでに五六年一月の第四回作家会議において、先に引用したように、ハイムは『作家と権力』と題する演説を行なった。五六年一月といえば、ソ連共産党第二〇回党大会（二月）の、まさにひと月前である。もし作家会議の開催が少しずれて、フルシチョフの秘密報告以後になっていたとしたら、この会議の様子も全く違うものになっていたであろうし、もちろんハイムの演説もはるかに批判的なものになっていたであろう。

しかし、こうした言ってみれば、まだ体制寄りの発言でさえも、早くもウルブリヒトの批判を招いているのだから、面白いといえば面白い。西側世界から帰還した文学者は、当局にしてみれば西側的観点から何を言い出すかわからない、と神経質にならざるをえなかったこともあろう。

批判を受けた個所はどこかというと、「勇気」をめぐる問題であったようだ。ハイムの「作家には勇気が欠けている、ということが言われてきました。（中略）わたしたちの多数は憶病者ではない、と信じていますし、わたしたちは、批判や、大小の権力者たちのあげる人差し指や眉毛を恐れはしません」[5]という発言に対し、ウルブリヒトは、次のように言う。

たしかに勇気を示すことは必要だが、どういう意味で勇気を示すのかといえば、例えば、小市民的習慣と戦う勇気を示すことは必要だし、もっと大きな課題を解決するのを主として妨げているブルジョワイデオロギーの影響と戦うのに勇気を示すことは重要だと、[6]勇気を示す方向をねじ曲げて、すなわち党指導部の側に都合のいいように引きつけて勇気を示す方向を指示したわけである。

しかしよく考えてみれば、たしかに西側世界においては、そういうことをするには勇気が必要だが、社会主義ＤＤＲにあっては、党が戦えといっているブルジョワイデオロギーと戦うのに、いったい誰が勇気を示す必要があろうか。それと逆に党公認の闘争に参加しない方が、あるいは反対するほうがはるかに勇気がいるのである。

ということは、ウルブリヒトはハイムのいう勇気の危険性を敏感に嗅ぎ取ったからこそ、勇気を無力化することにしたのである。作家たる者は権力者の思いどおりになるほど臆病ではないぞ、というハイムの思いこそ、党にとって面倒なことはないからである。ハイムを黙らせようとして、壁の崩壊にいたるまで、どれほど手こずったかを考

えてみれば、この五六年一月の段階でハイムの本質を見ぬいたウルブリヒトには、先見の明があったといえなくもない。

またウルブリヒトは、ハイムが、文学に対して期待しすぎてはいけない、と語っているが、もしそうならこの会議の開催に反対せねばならなかっただろう、というのもこの会議の意義は、これまで達成されたものの成果を総括し、新たな大いに高度な課題を設定するところにあるからだ、とも言っている。[7]

ハイムは、現にある事実に基づいて、わが国の文学に関して期待しすぎないよう警告したとしても、需要の大きいことはよく承知しているし、わが国の文学生産は、商品生産一般と同じである、つまり需要は供給より大きいから、現にあるものよりもはるかに多く消費されるであろう。[8]という一般的前提を述べたにすぎない。

「労働者階級と住民自身、この一一年間の発展の中ですでに相対的に高い意識を獲得してきた。自分たちの大いなる成果を誇りとし、当然ながら作家には後ろに下がるのではなく、以前の条件下で可能だったよりも高度な芸術的業績を成し遂げるのを期待している」[9]というウルブリヒトの期待も、わからぬわけではない。当局としてはそうあって欲しいわけだが、ハイムがそう期待してはいけない、と水を差すようなことを言うとはけしからん、と言いたいのだ。

だがハイムは、実作者の立場から、状況を客観的に分析する。文学に対する需要が西側にくらべて高いことを認めつつ、それがいまだにカヴァーできていないことの原因を列挙していく。第一にＤＤＲでは、毒物の禁断療法という大実験を始めたことである。今なお西側で読まれている大量の文学（将軍の回想録、ミッキー・スピレーン、ハンス・グリム、ポルノ、大量殺人の賛美）を遠ざけた。第二に新しい、より良い、現実的な通俗文学が必要だが、

ＤＤＲでは、退屈という大罪が、あまりにもしばしば文学的美点と見なされている。正直で品がよく、きわめて正しくはあるが、他の点ではぎこちなく単純といった本や作品が賞賛され、支援されてきた。第三に、異常に美しい女性像を作ろうとしたが、石からその像を彫り出すのを仕上げられなかった彫刻家を、特に賞賛し、報いようとは誰も考えない。文学においても、不格好、不細工、へたくそな半完成の石材だが、ただ生きているモデルと作者の意図が大変すばらしかったという理由だけで飾り立てられ、大量に出版される。こうしたことがＤＤＲ文学の発展を妨げている。第四に労働者や農民階級出身だからその作品に弱点があっても仕方ないといった、つまり階級の連帯感を悪用したり、プチブル的慈善本能から、二種類の基準を当てはめるようなことをしても、作者にも、文学全体にには役立たない。[10]

こうして見てくると、ハイムはウルブリヒトの言う成果を総括し、新たな課題を設定するという以前の段階を指摘したにすぎず、名指しで批判されるほどの事ではないのである。しかしその指摘が的を射ていただけに、当局としてはうるさく感じたことだろう。第四点にしたところで、五五年に、芸術・文学はもっと国民と連帯すべきことを訴えた労働者の「ナハターシュテット書簡」から五九年の「労働者諸君、ペンを執れ！」式の「ビターフェルトへの道」運動に対するハイムの、こうした一連の当局主導の文化政策に対する先取りした回答と見ることもできよう。労働者階級に対する芸術家の側の迎合的態度を戒めたものである。

「ナハターシュテット書簡」の、血と肉の通ったありのままの労働者を描け、新しいものを求めての戦いにおいて、労働者を元気づける偉大な責任感や情熱、熱気を示せ、という要求に対し、ハイムは、現実には労働者の肉は余りにも弱々しく、その血はあらゆる可能性に憧れてはいるが、新たなるものを求める戦いに憧れることはめった

にないから、どうやって労働者に血と肉を与えろというのか、と反問している。「作家は存在しているものに対して、目を閉じることはできない」が「しかし美化することは社会主義の致命的な敵である。」[11]と明確に言い切り、現実をリアリズムの眼で見れば、当局の笛にのって容易に踊るつもりはない、という気骨を示していたのである。

『自伝』によれば、当時すでに五三年六月のベルリン暴動の小説『Xデー』、のちの『六月の五日間』を半分ほど書き進めていたハイムは、この小説が出版されるのは、作家たるものは、何らかの政治的立場が望むような人間ではなく、ありのままの人間を描かねばならないことが容認されるときだろう、と考えていたし、「ミンスクは世界一退屈な街だ」と書くことのできるのがリアリズムということだ、とのブレヒトの例の言葉も聞いていた。それ故にこそのこの作家会議での批判的言辞だったという。自分はブレヒトほど利口でないから、すぐ心の内をさらけ出してしまうとも書いている。[12]

こうしたハイムの直言に対し、当局の代弁をしたのがヴィリ・ブレーデルである。ハイムはナハターシュテット書簡に何も学ばず、わが国の真の進歩的勢力を認めようとせず、そればかりか、特殊な政治的状況がわが国の才能の持ち主を限られた数にしていると言った、と非難し、さらにハイムの発言しなかったことまでつけ加えて批判した。

これに驚いたハイムは、「反論すべし、このままにしておくと君の敗けだよ」とのトルコの詩人ナジム・ヒクメットに励まされて、ブレーデルに不当個所の撤回を申し入れ、翌日ブレーデルの不当な批判に基づいてなされたウルブリヒトの演説の中の当該個所を、全員注目のなか、ウルブリヒトの眼前で訂正するということをやってのける。[13]

こうした事実は一体何を意味しているか。DDRのスターリン、党の第一書記に楯突くというのも、当時の仕来

たりを知らなかった蛮勇だ、といえばそれまでだが、五二年にＤＤＲに帰還して四年足らずして、しかもスターリン批判以前に、ＤＤＲ社会主義の本質が何であるか、ハイムは気づき始めていたということだろう。新聞のコラム欄を書き続けていたハイムとしては、それなりにＤＤＲ社会を勉強し、知識もふやしていったに違いないし、ものを書くには当然当局とのやりとりがあったろう。

そう考えると、ハイムのこの第四回ドイツ作家会議での演説の後半部もなかなか微妙な問題を提起しているといわねばなるまい。

心情、確固たる政治的立場、階級意識ないしは労働者階級との連帯意識は、作家の仕事を容易にするというが、そもそもそんなことはない、とハイムは提起する。誰のために、何のために書くかを知っているのはひとつの心情の軽減ではあるが、これを知っていることがまさに、作家にさまざまな責務を課し、その責務がかれの創作を途方もなく複雑にしているのだ、と作家の創作過程は、当局のいうほど容易なものではないことを明らかにする。新しい、まったく別の支配階級を持ち、その支配階級の一部であるわれわれは、それに責任を負ってもいるわけだから、そして言論統制も、検閲もないから、書くことのできること、口に出して言うことはできるが、その一撃がどこに行きつくことになるのか、よくよく計算もしないで、単純にそれになぐりかかるようなことはできない、その点にわれわれの心の検閲官が介入するのだ、しかし作家の創作過程というのは孤独な作業であって、絶え間なく心の中で行われている情熱と検閲官との間の問答では、どちらが正しいのか、必ずしも容易に決めることはできない、われわれのうちの誰がいったい、自分の人生経験、闘争経験について、学んだり、見たりしたことについて、自分は常に正確に知っている、つまりこれは言うことができるし、言わねばならない、あれは言わないでいたほうが言い、

と確信しているだろうか。だから作家には勇気が欠けている、といわれてきたが、われわれの多数は憶病者ではないし、批判や大小の権力者たちのあげる人差し指や眉毛を恐れたりはしない、とハイムは続ける。そしてさらに、新しい時代に不慣れなわれわれはさまざまな事実に直面してためらう瞬間があるが、その時に何も言わず、曖昧な態度を取りがちだ。しかしそれは作家としての使命を裏切り、同時にまた偉大な事業を裏切ることである。したがって肝心なのは創作するにあたって、日々刻々下さねばならないさまざまな決定である。そして正しい決定を下すことのできるのは、人びとを正しく判断する場合のみであるとすれば、われわれ作家の課題は自らの全責任を自覚し、人間と人生をそのすべての多様さと、矛盾に満ちた発展のなかに描き出すことである、と発言を結んでいる。[14]

こうした発言を読み返してみれば、社会主義を志向してＤＤＲに帰ってきた同じ亡命者といえども、アメリカ帰りの、少なくとも資本主義的自由を体験してきたハイムと、ソ連帰りのウルブリヒトとでは、やはり考え方が決定的に違うと言わざるをえない。一方が政治的立場、階級意識、連帯意識を強調し、他方はあくまで作家個人の営為にこだわる。そしてその個人は、確信が持てなかったり、重大な決定に逡巡する人間である。心の中の検閲官にこだわる個人である。大小の文化官僚が党の名のもとに外部から決定を下して、それを個人に押しつけていくやり方とは根本的に異なる。

したがってブレーデルのような代言者が得意顔してしゃしゃり出てきて、あることないことを言いつのり、ハイム否定に出たのもわからないではない。ハイムのように必ずしも党路線に従わない行き方は、党として容認するわけにはいかないのである。

五二年二月のスターリン批判の直前、ハイムは社会主義社会建設支持の立場とはいえ、すでにＳＥＤ路線、すな

すなわちスターリン式社会主義とは考え方を異にしていたと言えるのだ。

注

① Nikola Knoth: Das 11. Plenum —Wirtschafts- oder Kulturplenum? Kahlschlag, S. 65.

② ebd. S. 64

③ ebd. S. 64

④ Stalin verläßt den Raum, S.291f.

⑤ Der Schriftsteller und die Macht, S. 272.

⑥ Walter Ulbricht: Fragen der deutschen Nationalliteratur, Dokumente zur Kunst, Literatur und Kulturpolitik der SED. S. 425.

⑦ ebd. S. 424.

⑧ Der Schriftsteller und die Macht, S. 265 f.

⑨ Dokumente zur K. L. u. Kp. der SED, S. 424.

⑩ Der Schriftsteller und die Macht, S. 266 ff.

⑪ H.-D. Sander, S. 148 f.

⑫ Nachruf, S. 596.

⑬ ebd. S. 597 ff.

⑭ Der Schriftsteller und die Macht, S. 270 ff.

一〇、

最後に、もう一度、六五年の第一一回中央委員会総会のホーネッカーによる政治局報告へもどってみよう。当時SEDが芸術・文化状況をどうとらえ、何を恐れ、何を規制したがっていたかを、時代の状況とのかかわりのなかにもう一度振り返って見ておくためである。

まず社会主義における芸術の役割については、「社会主義的人間の生活と世界像を豊かにすることであり、社会主義社会における闘争と勝利、紛争とその解釈を表現すること」[①]であるが、それには、「芸術のあらゆる分野で、資本主義的過去からの古いもの、遅れたものに対する断固たる戦い、そしてアメリカのセックスプロパガンダに表われているような資本主義的非分化と不道徳の影響に対する戦いが必要である。」[②]これに比べて「わがDDRは清潔な国である。そこには礼儀とよい慣習のために、倫理と道徳という動かしがたい尺度がある。わが党は社会主義に害を与えるという目的を追及する帝国主義者たちによってなされている不道徳のプロパガンダに断固として反対している。」[③]

それにもかかわらず過去数か月間に、いくつかの青少年による事件、つまり犯罪行為、暴行、学習や労働の場での規律違反などが起きている。こうした事件には西側のテレビや放送の否定的影響が表われているが、同時に、これら不道徳の現象の原因、社会主義とは疎遠な生活様式の原因は、わが国のいくつかの映画、テレビ放送、劇作品、文学的作品、雑誌の中にも見い出すことができる、として具体例としてビーラーやミュラーの作品が挙げられる（先に引用した中央委員会文化部によって非難された作品である）。

つまり「こうした芸術作品には、矛盾を絶対視し、発展の弁証法を無視する傾向があり、思いつきのわく内にこじつけて解釈されるでっちあげられた紛争がある。社会の発展の真実がとらえられていない。人間の労働の創造的性格が否定されている。個人に集団が、党と国家の指導者がしばしば冷たいよそよそしい権力として対立している。われわれの現実は、ただ幻想的な美しい未来への困難な、犠牲に満ちた通過段階として――氷河期と共産主義の間のフェリーとして（ミュラー『建設』）見られている。何人かの〝矛盾の哲学者たち〟は、自分たちだけが、葛藤を見つけ出し、普遍化する能力を独占している、と主張している。実際にはＤＤＲの人びとは、党と政府に指導されて、社会主義の包括的な建設にあたって発生する諸矛盾を、かれらの実践的な考えぬかれた、目的のはっきりした労働によって解決するという大変な努力をしている。われわれの社会の発展の過程で生じた諸矛盾を、われわれは大きく前進することによって解決してきた。その点にわれわれの発展の弁証法がある。そういってよければ、社会生活を諸矛盾の集積としてしか見ない哲学の信者たちにはレーニンの哲学に関する書簡を徹底的に読むことをすすめたい。」④

「これは矛盾をはらんだ同時代の現象に対応するよりも、むしろ伝来の文化遺産に身を寄せようとする、まったくヴィクトリア王朝時代の道徳にまだとらわれている」⑤姿勢といわねばならず、またそうした現実離れした思考で、社会主義社会の発展と矛盾を解決できる、というのがまさに党指導部の考え方なのである。党の指導に従って大いに努力すれば、またレーニンの哲学についての書簡を徹底的に読めば、矛盾を解決できるというわけだ。

しかし芸術にたずさわる者は、社会生活をそう単純なものだとは考えない。文字通りさまざまな矛盾の寄せ集めが現実の生活であり、そこにさまざまな葛藤が生じてくるところに作品のモティーフが求められる。党のいうよう

に簡単に矛盾が解決するようならば、本来の芸術はなりたたない。党自身の主導になる「ビターフェルトの道」は、芸術と生活、芸術家と人民の分離を克服せよ、と言ってきたのではなかったか。人民の生活を知れば知るほど、党の指導と人民の生活との間の矛盾を取り上げざるをえなくなる。これを突きつめていけばいくほど、党のスローガンと現実生活との乖離がますます明らかとなっていく。

したがって「すでに一九六四年の第二回ビッターフェルト会議において、それは同時に一九五九年のビッターフェルト運動の埋葬であることが見え見えでもあったが、新経済システムの諸原則が〝サブシステム〟としての文化領域にも転用される決議がなされた」[6]のも無理はないのだ。ここに「ビッターフェルトの道」は終わりを告げ、党主導の強権的姿勢はますます強まっていくことになる。

こうしたウルブリヒトやホーネッカーに見られるような前世紀の道徳観、倫理観で、核と革命の時代を律することができるとする時代錯誤的考え方、またこの時代の不道徳的風潮は、資本主義的プロパガンダに踊らされる芸術家たちにも責任があるとする短絡的な物の見方、社会主義建設の途上で発生する諸矛盾は、党の指導に従って労働しさえすれば解決できるとする単純な弁証法の理解、文字通り「自分たちだけが葛藤を見つけ出し、普遍化する能力を独占している」という夜郎自大的態度で、資本主義的過去と断固戦え、などということ自体、自己矛盾もはなはだしいといわねばならない。自分たちだけが前進し、先頭を走っていると思っていても、実は周回遅れの先頭だったということもありうるのだ。

六二年一二月三一日付けの当時未発表の断片[7]でハイムは、党の言うことは正しい、つまり党がそう言っているからである、というテーゼは、主張されたことを白地で受け入れることを要求するのと同じく、信仰を要求するこ

とであると書いている。その論理を追ってみよう。

この党の無謬性信仰に決定的な衝撃が加えられたソ連共産党第二〇回党大会と、それに続く第二二回大会で、スターリンの後光が破壊されたことは、同時に党の無謬性神話が破壊されたことを意味していたわけだから、「遅くも両大会以後は、党の言葉が事実と、ないしは少なくとも推定的事実と、人間的思考に受け入れられるものと矛盾しないよう、きびしく留意せねばならないだろう。同じく、人びとは工場や営業所で、畑や市場で、〝党の言う〟ことが、また事実と一致しているかどうかを対比し、吟味している」[8]はずだ。

にもかかわらず、党の側から周期的にくり返される、デカダンスの危険、抽象主義、形式主義、暗澹たる状況といった、芸術上の問題に対するヒステリーじみた印象を与える介入は、何を意味しているかを分析して、その背後にいるのは、長年ほかならぬ上から望まれ、必要とされる実用芸術を作り、そうしたやり方で快適な、気楽な生活をおくってきた多くの平均的な、また平均以下の才能しかない連中だとする。この連中は市民階級的なものから引き継いだ形式と方法に対して確たる関心があり、この点かれらには道徳的、政治的、経済的保証があるが、芸術上の実験はかれらに不安をもたらす。自分たちの作品の質の悪さを、快適な生活を保証している欺瞞を見ぬかれることを恐れ、それに才能は取るに足らぬのに恐怖心はそれに反して大きいから、すぐさま唯一かれらの自由になる手段、すなわち政治的密告で身を守ろうとする。[9]

政治的指導者にしてみても、ホーネッカーの政治局報告に見てきたように、かれらと事情は変らないから、こうした実験をごく簡単に圧殺できるし、また圧殺しているが、それでは十分ではなく、火あぶり、破門に処せねば気がすまない。

抽象的、形式主義的芸術は、まさに何も言うべきことを持っていない、という点にこそメッセージが込められている。すなわち、われわれは、君ら政治家たちによって指図された形式を受け入れるのは拒否する、という恐ろしい意味である。それは政治的指導部の無制限な権力行使という要求を否定することであり、かれらの好みの傾向を国家の教義にまで高めることを拒否することである。この点に挑発がある。

したがって政治的指導部の、合法的な芸術形式を決定する権利を否定することは、同時に内容を固定し、何が真実で、何が真実でないかを判定しようとするかれらの権利を拒否することである。この一点が突破されれば、まさにそれは全面的な権利要求につながってしまうであろう。[10]

右の分析に見るように、ハイムはすでに六二年の段階で、政治局に代表される党指導部が何を恐れているのかを、正確に知っていた。「マルクスとエンゲルスの思想は、実際にキャンバスの上の二、三の汚点、曲った金属の一片、言葉の無意味な並列によっておびやかされる」[11]ことはないが、それを許せば自分たちの権力がいずれ失われることを党指導部は知っていた。

であるがゆえに、かれらの必要としたのは、党のスポークスマン、伝導ベルトとして党の利益に奉仕する作家・芸術家であり、かれらによって生み出される単純で理解しやすい形式、また自分らの生きがい、経験に相応した内容の芸術によって影響される大衆なのである。

さらにいえば、「現存する社会主義において、指導的人物たちが異常に敏感だったのは、かれらが不安であり、自信がなかったからである。かれらは権力を自分で獲得したのではなく、手に与えられたからだ。つまりかれらには獲得した正統性の感覚が欠けている。どんな種類のリアリスティックな物語も、批判もかれらが最も敏感なとこ

ろを、つまり正統性の理由づけ、権力の正統さ、権力を正統化する感情において、打つところがあったのだ。それゆえかれらは文学を注意深く、腹立たしい感情をいだいて観察する。文学は彼らの体面を危うくしたのである。」[12]

ハイムはしかし、芸術の形式的な実験という側面からではなかったが、また党の指導的役割の否定と明言こそしなかったものの、六五年には『ミンスクの退屈』によって、党指導部の根幹をなす問題にふれた。ホーネッカーによる名指しの非難をも、疑う余地のない巧みな反論によって打ち破り、さらに内務大臣からの召喚と言った脅しにも屈せず、党指導部の期待するような芸術家像や大衆像は、描こうとしなかった。

逆に、権力の威嚇に屈することなく政府のおえら方たちを馬鹿呼ばわりし、徹底的に虚仮にした作品、しかもその最後では問題の作家が、自らに下されたさらし刑などものともせず、国民大衆と連帯し、女たちの花束に囲まれて勝利を得るという、はなはだ挑発的な作品を発表することで、第一一回中央委員会総会での総批判に対する明確な解答、いや挑戦状としたのである。

それは六八年の「プラハの春」がつぶされつつある夏に一気に書き上げられ、七〇年にスイスで出版された小説『怪文書、もしくは女王対デフォー』である。[13]これは一八世紀初頭のロンドンで、作家ダニエル・デフォーの身に起きた出来事に基づいた歴史小説、いやその衣裳をまとった現代小説である。「あなたはこの作品で文学のできることのすべてを、感動、楽しみ、教訓教育をくみつくした」[14]と言われ、「デフォーのような人物と、あの悪意ある迫害、これは権力と精神のつき合いに関しては傑作のひとつだ」[15]と自ら誇る作品だが、この作品がまたのちにハイムの身に大きな問題を引き起こすことになる。しかしそれについて書くにはもはや紙幅がない。いずれ稿を改めることとしよう。

注

①②③④ Dokumente zur K. L. u. Kp. der SED, S.1076 f.

⑤ ヴォルフガング・エメリッヒ著『東ドイツ文学小史』津村正樹訳　鳥影社　一九九九年、一三六-一三七頁、Wolfgang Emmerich : Kleine Literaturgeschichte der DDR. Gustav Kiepenheuer 1997. S.182.

⑥ 東ドイツ文学小史　一三三頁、Emmerich, S. 186.

⑦ Fragmente, Bisher unveröffentlicht. Wege und Umwege, S. 275.

⑧ ebd. S. 276 f.

⑨ ebd. S. 277 f.

⑩ ebd. S. 278 f.

⑪ ebd. S. 277.

⑫ Regina General/Wolfgang Sabath: Stefan Heym. Elefanten Press 1994. Ich habe geschrieben, was ich richtig hielt. S. 68 f.

⑬ Die Schmähschrift oder Königin gegen Defoe. Gesammelte Erzählungen, Werkausgabe Bd. 11. btb. S. 195 ff.

⑭⑮ General/Sabath, S. 77